
その翼に願いを込めて...

魔刀・統一の証

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その翼に願いを込めて…

【Nコード】

N0277U

【作者名】

魔刀・統一の証

【あらすじ】

人は皆翼を持っている。しかし、翼を使いこなせるのは翼に真の願いを込めた者だけ……。翼を使いこなした者達が「異能」を使い、願いを叶える。

プロローグ（前書き）

処女作です。文才がない作者ですが温かい目で見守ってもらえるとうれしいです。

プロローグなので短いですがどうぞ

プロローグ

僕は願った。

きつといつか叶うことを信じて。

この願いが『罪』になることを知っていても。

その『罪』となった願いが自分を押しつぶすことを知っていても。

たとえその『罪』が自分以外のだれかを傷つけることを知っていても。

でも、その願い自体は『罪』ではない。

それはごく普通の願い。

それは僕にとって許されない願い。

それは幼い僕が抱くには少しおかしな願い。

同年代でこんな早くこの願いを『翼』に込めた者はいないだろう。

その願い…

それは…

『自由になりたい』

そして、

『全て壊れてしまえ』

プロローグ（後書き）

誤字脱字などの指摘がありましたらお願いします。

第一話：「近づかないでくれる?」（前書き）

文才がないですが読んでくれると言ひます！

追伸：評価や感想をくれるととっても喜びます。

第一話：「近づかないでくれる？」

ここは神奈川県のとある高校の前。まあ、とあるっと言っても今日から俺が入学する

私立扇山高校だったりする。なぜこんなことを考えているかという
と、

「早く来すぎた・・・」

早い話が暇なのである。することもないのでざっとこの世界のことを
思い出してみよう

と思う。

人は皆『翼』を持っている。これは大昔からずっと変わらないこと
だしなんら問題はな

い。しかし、その『翼』に問題があった。『翼』は普段は物理干渉
もなければ目視もで

きない。だから、関係ない人にとっては一生関係ないかもしれない。
逆に関係のある人

にとっておおいに関係があることである。さきのとおり物理干渉
もない『翼』だがあ

ることをした者に力を与える。あることとは『真の願い』を『翼』に込める・・・だけ

である。これは簡単そうで難しい。なぜなら、人とは無意識の内に願いを何個も自分の

中に抱いているからである。他の願いを全て捨ててまで手に入れた願いを見つけるこ

とが最大の難関だろう。それを見つけ、『翼』に込めた者が願いを叶えられる力。それ

を『翼術』^{ちゅうじゆつ}と呼ぶ。翼術は人それぞれで翼術を使うときに具現化する

『翼』の色も似ていることはあるが同じものはない。

そんなことを考えて歩いているうちに校舎裏に来てしまった。校舎裏にも桜があるとは

さすが私立だな金がある。つま、俺『御党』^{ごとう}統也^{とうや}の親も払って

いるけどな。そんな桜の木の下に一人の女の子が立っていた。それもただの女の子じゃ

ない、かなりの美少女だった。腰まである綺麗な黒髪をなびかせて鮮やかな桜を背景に

して・・・やばい見惚れてしまった。俺は慌てて目を反らした。目を反らした先には猫

がいた、しかも黒猫だ。その黒猫は桜の木の下を歩いていた・・・枝が折れかけている

桜の木の下を。

っあ！落ちた・・・猫の真上に・・・

って、

「危な「危ない！！」」

俺が声を上げ駆け出していた時黒髪の美少女は声を上げ猫に手をかざしていた。そして

、少女に翼が生

えた。いや、生えたじゃない翼が見えるようになった。その翼は純白で綺麗だった

、黒髪とコントラストが可憐だった。猫にはすまないがまた見惚れてしまった・・・そ

の間にも枝は落下していつている。っあ、やばい！

でも、猫に枝は当たらなかった。翼術でできた障壁に阻まれたからだ。そして・・・こ

つちに枝が飛んできた・・・

「え？「つく、間にあつて！」」

また少女は声を上げる。だが、僕は冷静だ。まず、蒼白い翼を広げる。

「つえ！」

今度は少女が驚きの声を上げる。そして俺は言った。

「破壊せよ」

枝は蒼白い閃光に包まれて跡形もなく消え去った。

「はあゝ。」

思はず溜息を漏らしてしまった。まあ、翼術をあまり使いたくなかったから仕方ないけど、

理由は・・・

「あなた高位の翼術師ね？あんなに翼の展開から翼術使用の間隔が短いなんて・・・」

こんなことになるから・・・まあ、バレたものは仕方がない。

「そっちだつてかなり展開から使用が短かったが？つま、そっちの能力は俺とは正反対

ぽいけどな。」

「つつ！・・・お互い能力について詮索はやめましょう。」

おお、意外な提案だ。つま、理由があるのだろうか、やすやすと提案には乗れない。

「なぜだ？知られて困るような能力じゃないだろう？」

「つつ！！」

また少女の顔が歪み、そして少しの静寂が流れた。そして少女は、

「はあく、仕方がないわね・・・私に近づかないでくれる？」

つと言い放った。

第一話：「近づかないでくれる？」（後書き）

誤字脱字があつたら報告お願いします。

第二話：「…あなたとは仲良くなれそうにないわ。」（前書き）

こんな作品に付きあってもらえて作者はうれしいです。

第二話：「…あなたとは仲良くなれそうにないわ。」

「はあ？なんで急にそんなことを言われなきゃいけないだよ！第一あんま距離近く

ないし！」

それに今こいつ目が……

「っあ、ごねんなさい。物理的な意味はな……あるわ。」

「あるのかよ！そこはないって言い掛けたんだからわざわざ言い直すなよ……。」「

こいつなんで目が……

「だって…、言い直さなきゃ自分に嘘つくから。」

やっぱり…

気づいてしまった…

だから、気付いた責任をとる。

「もうやめにしないか？」

「なんのこと？」

「だから…、そんなに罪悪感を感じているなら人を傷つけること言うのをやめに

しないかと言っているんだ。」

「つつ！」

やはり凶星か。

「……」

「……」

一時の静寂が流れた。

そして、黒髪の美少女は口を開く、

「どうして分かったの？」

「簡単な話だ。お前の目に罪悪感が宿っていたからだ。」

「どうしてそんなことが！」

「俺は本当に人を見下し、蔑み、傷つけ、罵る奴らをたくさん見てきた。だから、

無理をして人を罵っているが分かった。本気やふざけて言っている奴の目に罪悪

感は宿らないからな。」

「でも安心しろよ。なんらかの理由があるんだろう？俺以外気が付ける奴なん

てそうそついないから。」

それだけ言いきつたらまた静寂が流れてしまった。

そして、それを破るのもまた黒髪の美少女だった。

「あなたの名前は？」

「御党 統也だ。お前は？」

「たちはな……たちはな とつが橘 冬華」

うん、少し丸くなったな。

「じゃあ、御党くん。今度はお願いするわ。私に近づかないで……」

「……理由は聞かないがなにか理由わけがあるんだな。」

「……」

無言の肯定か…

だが、

「まあ、気が向いたらそのお願い聞いてやる。」

「つつ！だめ！！私に近づいては！！」

「そんな反応をするな、余計にほおっておけなくなる。俺たちは似た者同士なん

だかな。」

そう、俺たちは似た者同士。特に理由有りのことから、翼術に秘密があるところが

似ているな。

「安心してくれ。橘の翼術について、今の話についても口外しない。後、俺のこ

とについては同じく口外しないでくれ。」

橘は困った顔をして言った。

「…御党君。」

「なんだ？」

「…あなたとは仲良くなれそうにないわ。」

「そうか？俺は仲良くなれそうだと思うけど？」

橘はさらに困った顔をしたが、俺は

「じゃあな、ちょうどいい時間になったから俺は校舎に入る。」

時間は全然ちょうど良くないけどな。

つま、一方的に言って来た道を戻っていった。

後ろからなにか聞こえるのは気のせいだ。

きつと……

第二話：「…あなたとは仲良くなれそうにないわ。」（後書き）

感想、評価、誤字脱字報告お待ちしております。

第三話：「私になにか悪いことした？」（前書き）

駄文に付き合ってもらえて作者はうれしいです。

第三話：「私になにか悪いことした？」

冬華SIDE

「じゃあな、ちょうどいい時間になったから俺は校舎に入る。」

はあ、なに言ってるのこの人？一方的に告げて校舎に入るってただけ人の話

聞く気がないのよ！

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ！」

だけど御党君は立ち去って見えなくなってしまった。

そして私は思った、

「本当に仲良くなれそうにないわね……」

つと。

SIDE OUT

校舎に入った俺は事前に見ておいたクラス表に書いてあった自分達の教室に向

かう。とはいっても、俺は入学時のクラスは決まっている。1 - W。それが俺

が一年間過ごす教室だ。ちなみに他のクラスA〜Fである。ここで疑問が浮か

ぶ。何故W？Gじゃないの？と。簡単な話だ。WingのWだからだ。俺たちW

組の生徒は全員が高位の翼術師なのである。何故高位の翼術師が別に分けられ

るかというと、一般生徒と喧嘩などになった場合に殺してしまうつと最悪のケ

ースが想像されるからである。このことは一般の学校に言えることなので、高

位の翼術師は全国にある何校あるそういった翼術師を受け入れる学校に強制入

学させられる。って最近どうでもいいことを思い返すことが多いよ
うな…きつ

と気のせいだな。うん。

俺はWクラスのドアを開けた。そして、驚いた。なぜなら、机一つ一つに名前

が書いてある紙が置いてあるからだ。しかも、どう見ても不規則的

に並んでい

た……ああ、そういうことか！

じゃあ、俺の隣は…

「やっぱり…」

窓側の一番後ろの席である俺の席の隣は…とっても仲良くなれそうな人だった。

冬華SIDE

あの後私は少し桜を眺めてからWクラスにむかっていった。

それでいま教室の前。教室の中には私の秘密を知る人、御党君がいると思うと

気が重くなってくるが意を決して教室に入った。そこには…ランダムに並べら

れた席順と机の上に置かれた名前の書いた紙があった。

「そこの席に座れてこと？」

なんて言いながら自分の名前の書いてある紙を探した。そして…見つけてしま

った…見つけたでは見つけてしまった…最悪の場所…そこは…

窓側から二番目の列の一番後ろ

立地条件は最高だけど…

隣がそれを軽々しく上回るぐらい最悪だった…

そう…隣は…

御党 統也だった。

私は思わず言った、

「私になにか悪いことした？」

と

S I D E O U T

第三話：「私になにか悪いことした？」（後書き）

感想、評価、誤字脱字報告お願いします。

第四話：「廊下に来て。」（前書き）

前回から主人公いがいの視点は、SIDEであらわしています。

では、どうぞ。

第四話：「廊下に来て。」

「私なにか悪いことした？」

「どうした？なんかあったのか？」

うん、実に心配だ。

「ええ、最悪なことになったわ。」

「どうしてだ？」

「よりもよってなんであなたが隣の席なの？」

「しかたないだろ？」

「なにがしかたないよ！理由があるならまだしも完全なランダムじゃない！」

「ん？ランダムじゃないぞ？」

なに言ってるんだ？

「つえ？」

「この席順は能力によって決められてる。橘が隣なのは多分お前が一番強い」

防御障壁をはれるからじゃないか？万が一のための保険ということ

だな。」

「っな……」

「ちなみに俺の席がココなのは万が一の場合一番被害が少なくてすむからだ

な。廊下側だと通りかかった一般生徒が被害にあう可能性があるからな。」

「……」

あら、黙っちまった。

「……どうしてそんなことに気がついたの？」

「普通に状況把握したら。」

なんら驚くことじゃない。

「……？普通に状況把握したらそんなことにならないわよ。他になに考え

なかったの？」

「うん、他にかあ。隣の席の奴と仲良くなれそうだなあ〜くらいかな？」

他にはないな。

「御党君の隣は窓よ。なにを言っているの？あんなことに気がつくのに？」

「バカとなんたらは紙一重とはよく言ったものね。」

「橘こそ大丈夫か？俺の隣の席の奴はお前だけだろうが。」

「ほんとうに大丈夫だろうか？」

「あなたとは仲良くなれないって意味で言ったのよ。」

「っあ！そうなのか、よかった…。友人がバカだといやだからな。」

「…友人っていう言葉の意味が初めて分からなくなったわ…。」

「じゃあ、共犯者の方がいいのか？」

年頃の女の子はよくわからないな…

「…間違っていないところが腹立たしいわね…。」

「じゃあ橘、仲良くしよう。」

っと言って俺は手を差し伸べた。

「じゃあ橘、仲良くしよう。」

はあ？いまだに口走ってるわ…末期ね。

なのに…

私の秘密を知っているのに…

だけど…

嫌じゃなかった…

こんな気持ち初めて…

私に言いよってく人はたくさんいたのに…

御党君だけ違った…

だから…

「なにがじゃあか分からないけど…」

「廊下に来て。」

少し信じてみることにした。

私の気持ちを…

SIDE OUT

第四話：「廊下に来て。」（後書き）

意見、感想、評価、誤字脱字報告お待ちしております。

第五話：「ありがとう。」（前書き）

すみません。もう少し早く投稿できたんですが、文が全部とんでしまった。書き直すのに時間がかかりました。

第五話：「ありがとう。」

俺は時計を見て、まだ時間が十分にあることを確認してから橋についていった。

冬華SIDE

「時間はあるから大丈夫だ。」

…全てお見通しってわけね…

「まず私の翼術についてだけどあなたの予想通り防御障壁をはる能力よ、

翼に込めた願いは『他人を幸せにしたい』よ。」

「それだけ聞くといい人だな。」

「そう。これだけ聞くといい人になる。でもこの先を聞くと私の評価は

罪人になる。それでも聞く？」

「お前は本当に人を傷つけたことはあるか？自分の意思で。」

「そんなこと一回もないわ。」

「じゃあ、大丈夫だろ？」

…気が狂うわ。

でも、嫌じゃない…

だから、話す。

「聞く覚悟あるのね…」

「…ああ」

どちらかというと私の話す覚悟のような気がするけど…

「問題は私の能力じゃなくて、体質にあったの。簡単にいうと不幸

体質。私の周りの人間は怪我をしやすくなったり、不慮の事故に巻き

込まれる可能性が高くなったりするの…。」

これでまた…

「今、これでまた一人…みたいなこと考えただろ？」

「っえ！」

「…凶星かよ。あのな言つとくけどお前の不幸体質は俺には効かんぞ。」

「な、なんで！」

そんなことは…

「俺が翼に込めた願いは『自由になりたい』。だから、その不幸が束縛

とみなされて自動排除される。」

「で、でも、さっき枝はあなたに向かっていった!」

「それは普通に俺の運が悪かっただけ。」

「……」

なんかもう黙るしかないわ…

まるで私…

「バカみたい…」

「どこがバカなんだ？」

「えっ？」

予想外の言葉に驚いてしまった。

「俺のこと心配してくれて、考えてくれたんだろ？なら、それはバカなんかじゃないだろ？それは…お前の心づかいが無駄じゃないって証拠

であり、お前の優しさだ。」

こんなこと言われたの初めて…／／／

今まではそれは本末転倒だとか、無意味だとかって言われきたのに…

認めてくれた…

だから…

私は…

「ありがとう。」

感謝の言葉を言った。

久しぶりの笑顔と共に…

S I D E O U T

「ありがとう。」

橘はそう言って笑った。

初めて見せてくれた笑顔。

それは驚くほど可憐で、

美しく、

かわいらしかった。

「……………／／／」

畜生ちよつと見惚れちまった…

「ねえ、一つ訊いてもいい？」

「なんだ？」

やっと平常に戻れた。

「あなたって皆にそんなの？」

「どう意味だ？」

「だから皆に優しく接してのかって訊いてるの。」

ああ。なるほど。

「いや、俺はどちらかというと冷たい。お前は俺に似ていたから…

だった。」

「だった？今は？」

「今は数少ない大切な友人だから。」

「こつ思うと俺って友達少ないな…」

「あら？私はたった今から友人になったってこと？」

「俺はもうチョイ前から友人のつもりだったんだけどな。」

「友人っていうのは両方が友人って思ってたものじゃない？」

「だから、私たちはいまから友人よ。」

「認めてくれたってことか…」

「なら、そうだな。よろしく、数少ない友人さん。」

「よろしくお願いするわ。たった一人の友人さん。」

第五話：「ありがとう。」（後書き）

意見、感想、評価、誤字脱字報告よろしくお願いします。

第六話：「…さすがにひどくない？」（前書き）

駄文ですが、楽しんでもらえれば幸いです。

第六話：「…さすがにひどくない？」

橘と俺はかけがえのないものを手に入れた。

こんなことがおきても、まだ入学式には時間がある。

家を出たときの俺がわからない…

なんでこんなに早く来たんだ？

つま、いいことだったってことは揺るがないだろう。

そんなことを思いながら教室に戻り、自分の席に着くと同時に…

「おい、統也。入学式初っ端から女づれとはいいい度胸だな。おい？」

話かてくる変なのがいた。

「橘。知り合いか？」

「私の知り合いなわけないわ。明らかにあなたの友人でしょ？」

「なんかいきなり会って間もない美少女に知り合いなわけがないって言わ

れたんですけど…ご説明をこの『早川 凌』にお

願いします。統也さん。」

なんかややこしくなりそうだな。橘はというと

「ねえ、御党君。この人に『それはあなたがあなただからよ。』って言うっ

てくれない？」

「了解した。」

「おい。無視かよ！しかも二人でなんてやりとりしてやがる！」

「おい、凌。」

「おっ！やつと相手をしてくれるのか？」

こいつバカだろ？

今俺がお前に言うことは唯一つだ。

「それはあなたがあなただからよ。っだそうだ。」

「さっきのしつかり聞こえてるわ！二回も傷つけないでくれ！」

「はあ？お前が説明しろって言ったんだろ？なにキレてんだよ！

三枚に下ろすぞ！」

「…申し訳ございません。」

本当に面倒だな…

「御党君の友人には見えないほど対象的な人ね。」

「ああ。でも悪い奴ではないことは保障してやる。」

「親友がやつと手を差し伸べてくれました…こんなにつれしことはない！」

「うるせえ！こっちは大事な話してんだ！本当に三枚に下ろされてえの

かてめえは！」

「……」

「よし！」

「御党君……さすがにひどくない？後、あなた。」

「えっ！俺？」

「名前はなんていうの？」

「早川 凌です。」

「じゃあ、早川君…私に近づかないでくれる？」

わお。凌に致命傷を与えたな…

「…てか、橘の方がひどくないか？」

「あら？そうなの？」

こいつ確信犯だな。元々近寄らせないために言ってるから当たり前か。

「神様…親友の彼女がいじめてきます。僕はどうしたらいいのでしょうか？」

「「今何て言った？」」

なんか幻聴が…

「え？親友の彼女がいじめてきます？」

「「こいつ（わたし）は彼女じゃねえ！（ないわ！）」」

おお。またシンクロか、すごいな。

「じゃあ、友達か？ははは！それはねえな。統也に俺以外の友人なんてありえねえもんな。」

「……」

「……」

いや、黙るしかないでしょ？ここまで言われたらねえ。

「…もしかしてマジで友達？」

「はあー。」

橘の溜息がこの場ではとても意味が深いように感じた。

第六話：「…さすがにひどくない？」（後書き）

意見、感想、評価、誤字脱字報告お願いします。

第七話：「…変なことしないで／＼」（前書き）

アクセス数が三ケタになりました。

読んでくれている皆さまありがとうございます。

第七話：「…変なことしないで／＼」

「はあー。」

橘は溜息をついて一步凌に近づいた。

そして、

「私はあなたが嫌いよ。これからは近寄らないで。」

「……」

それはさすがに…

「ははは。統也、いい友達を持ったな。」

「「へ？」」

予想外のセリフに二人して素っ頓狂な声をあげてしまった。

「…どうしてそう思ったの？」

「簡単だ。統也の友達が悪い奴なわけがない。もうひとつは、今の橘さんは

他人を救う時の目をしてる。やけに近寄らない方がいいって言うてるのはなにか理由あるとみた。能力は俺と似てる系統だろうな。」

このバカ。人の気持ちを察しすぎだ。

だが、そのバカがいいところもある。

「そうか？ いやあゝ照れる。」

「本当に読心系の能力だと思うぐらいだな。それってどうやって身につけ

るんだ？」

「で、実際の能力はなんなの？」

「傷の回復だ。他人限定だな。」

それだけ聞くとな…

「説明はそれだけいいのか？」

「いや、発動条件が特殊なんだ。」

「どんな条件なの？」

「対象の傷口を殴る。」

「……」

橘が絶句してる。「そんな冗談みたい条件あるわけないわ」みたいな顔で。

ああ。こんな感じで読心するのか。新しい発見だ。

「冗談じゃなそうだけど…。信じがたいわ。」

「そりやそうだな。俺も初めて聞いた時はこんな妄想野郎が現代にいたな

んてとか思ってたからな。」

「それは傷つく……。」「

仕方ないじゃないか。事実なんだから。

「しかも事実だった…。」「

「だから心を読むな。」

「……もう今日はなにが起きても驚かない自信があるわ。」

それはからかいがありそうなセリフだな。

「じゃあ、試してみるか?」「

そういつて俺は橘に近づき右手で顔を上げさせて、目が合うようにした。

「なあ、橘。これから『冬華』って呼んでいいか?」「

「え、えっ!それはえーっと……」

とまどっているな。

「だめなのか？」

「い、いや、そういうわけじゃなくて…理由を…」

「理由か？そんなの簡単だ。俺が冬華のことを悪くないと思っているからだ。」

「それってどういう意味？／／／」

「言わないとわからないか？」

「…言つてほしい。」

「俺は冬華のことをいい友人だと思っているってことだ。」

「……へ？」

表情が凍ったな。

「ははは。どうだ？驚くことはあっただろ？」

つま、怒られるだろうな。

「…変なことしないで／／／」

「！――」

おい、予想外だぞ。卑怯だろ…

こんなに顔を赤くして、

照れて、

上目づかいなんて。

こっちが惚れさせられそうだ。

「……／／／」

「……／／／」

「俺って邪魔？」

そんな凌の声がやけに響いた。

第七話：「変なことしないで／／／」（後書き）

意見、感想、評価、誤字脱字報告お願いします。

第八話：「え、ええ。すこしだったわ。」（前書き）

投稿が遅くてすいません。

第八話：「え、ええ。すこしだったわ。」

「俺って邪魔？」

「いやいやいやいや、じゃ、じゃじゃ邪魔じゃない。お前が

必要だ！必要すぎて困る！」

「そそそそそ、そうよ！あなたがいなくなったら私たちはどうすれば

良いの？」

本当だ。こんな状態で放置されたらたまったもんじゃない。

「どうすりゃいいって…イチャつきゃいいじゃね？後、あんたら焦りす

ぎ…。」

「iiiiiiii、いちゃつく？無理無理無理無理無理無理！」

「ああああああ、あなたに言つての？そんなこと、ででで

ででできるわけないわ！」

「とりあえず落ち着け……。」

っは！やべえ、かなり取り乱した…

「ああ、すまない。少し取り乱した。」

「ええ、私も少し動揺したわ。ごめんなさい。」

「いや、謝らなくていいから。後、少しじゃないから。」

「ん？少しだったぞ。そうだろ……冬…華。」

「え、ええ。すこしだったわ。」

やばい。名前で呼ぶとかマジで恥ずかしい…

「神様…。人間嫌いの親友が…ごめんなさい涙が…あれ？止まんないや。」

「……／／／」

「……／／／」

糞。凌のやつ急に自分の世界に飛び立ちやがって…

正直気まずい…

『あー、あー。新入生みなさんは講堂への移動準備を始めてください。』

なお、クラス誘導は上級生が行います。Wクラスの誘導は教師が行いま

すので、指定の席についてお待ちください。」

放送にこんなに感謝したのは初めてだ。

しばらくして教師が来て、講堂へ移動した。

入学式を椅子に座ってうけたことはよかったが、

どこの学校の校長の話は長いものだ。この学校も例外ではなかった。

あー、肩が痛い。

そんなこんなで教室に帰ってきたわけだが、

「……／／／」

「……／／／」

こんな感じで意識しっぱなしである。

いい加減普通にしたいがこういうふいんきも悪くないと思う自分もいたりする。

「いい加減、どうにかしてくれ。こっちの身が持たん。」

俺の前の席の凌が言ってきたがどうするか…

「そうね、このままでも埒があかないもの。」

「あ、ああ。そうだな。冬華の言つとおりだな。」

よし、今度はどもらずに言えた。

なんか、冬華の顔が一瞬赤くなった気がしたが気のせいだろ。

「で、話はかわるけどここの担任ってどうなるんだ？統也みたいな

色者が集まつてる可能性があるわけだ。それをまとめるのは至難の業

だと思うんだが。」

「俺みたいな色者っていうのは気になるがスルーしよう。」

「もしかして御党君…自分が色者じゃないと思つての？」

「冬華にも言われたくないな…」

「そうだぞ二人とも。」

「「お前（あなた）にも言われたくない（わ）！」」

そんな二人の声が響いた。

第八話：「え、ええ。すこしだったわ。」（後書き）

意見、感想、評価、誤字脱字報告よろしくお願いします。

第九話：「とても遠く感じるわ……」（前書き）

ちよつとふざけすぎました。すいません。

では、ごうごう。

第九話：「とても遠く感じるわ……」

「たつく、騒がしい奴らが集まったもんだ…。しょうがねえかもしんねえ」

もうちつと静かな奴らをよこしてほしいねえ。」

そう言いながら入ってきたのは女性にしては少し長身でスーツを着こな

した女性だった。

「お嬢共！もしくは野郎共！席に着け！」

そう言われて生徒たちは急いで席に着いた。

「よし。全員いるな？私の名前は織田^{おだ} 長巳^{ながみ}だ。呼び方は

自由だが”信長”だけはやめろ。後、このクラスの担当教科は芸術以外だ。

安心しろ。ちゃんと教育免許は持っている。全教科な。」

インパクトが強すぎる先生だ。

「注意事項だ。私の事前注意の無視が続いた場合は…燃やす。」

そういつて先生は翼を展開して手に真っ赤な炎をだした。

「「「「「……「「「「」

インパクトが強すぎて生徒たちは黙ってしまった。

俺も例外じゃない。

「つと、言うことで窓側から順に自己紹介をしろ。翼術に関しては言わな

くていい。」

翼術に関して言わなくていいのはありがたいな。

そんなこんなで自己紹介が始まり凌の番まで来た。

「早川 凌だ。得意なことはギャンブル、苦手なことは料理だ。

これからよろしく頼む。」

いや、教師の前でギャンブルはまずいだろ……

「おい。早川……」

ほら言わんこっちゃない。

「今度、私と勝負しようじゃないか。」

WHAT?

「いいですよ、やりましょう。先生がどんなに運がよくても俺には

関係

ありません。『サイコメトリー読心者』と言われている俺の前では！」

「…そんな通り名があるの？」

横で冬華がごもつともなことをつぶやいている。

「ほお、お前があの読心者が…ますます勝負が楽しみだ。だが、負けん。」

私だって伊達に『エビルプリンス第六天魔王女』とは言われていないんでね。」

「…先生にもあるのね……。」

もう呆れている冬華だった。

俺はというと…もちろん呆れていた。

そんな呆れた二人の前で凌は…

「なに?! 先生があの絶対勝者の第六天魔王女だって言うんですか
!」

まじめに驚いていた。そして通り名の前になんか前に着いた。

「私だって驚いた。あの不敗の読心者がガキだったなんて。」

なんかまた前に着いたぞ…

「先生と早川君がとても遠く感じるわ……」

「俺もだ……」

つて、いつかクラスの中で身近に感じてる奴はいるのか？

「先生いまなら引き返せますよ……。絶対勝者の第六天魔王女の名に傷をつけたくなければ引くべきです。」

「ぬかせ、ガキが！お前こそ不敗の読心者が一敗の読心者になりたくなければ引くんだな……」

「……」

「……」

まさに一触即発。そんなふいんきを醸し出していた。

だが、それはすぐに壊れた。

「まあ、この話は後だ。次の奴自己紹介しろ。」

っという言葉によって。

第九話：「とても遠く感じるわ……」（後書き）

意見、評価、感想、誤字脱報告あつたらぜひお願いします。

第十話：「じゃあ」とかむかつくわ。」（前書き）

昨日のアクセス数見て泣きそうになりました。（いい意味で）

今後もよろしく願います。

第十話：「じゃあ」とかむかつくわ。」

「じゃあ、御党。自己紹介だ。」

俺は仕方なしに立つ。

「御堂 統也だ。得意なことは…特にな「特になしはなしだぞ。御堂。」

…家事全般だ。特に料理。苦手なことは…「特にありませんもダメだと

思うぞ。統也。」…芸術関係全般にかかわることだ。」

なんだこの自己紹介…。約半分が他人の発言で構成されている。

「そう思うなら自己紹介に特になしを入れないことだな。」

「……他人の心を読むな。不敗の読心者。」

「お前が分かりやすいの悪い。」

こいつはこいつで心を読むし…はあ、なんかつかれた。

「じゃあ、前に戻って……」

ここから聞き流しておこう。

そして、空を見てるうちに冬華の番が来た。

「橘 冬華です。趣味は自然観察と動物観察です。苦手なものは幼い子供です。」

うわあ、絶対に印象に残んねえ。正直あんな自己紹介がうらやましい。

俺のは……。まあ、この自己紹介で人が寄ってこないことを祈る。

そんなことを思ってるうちに自己紹介は終わっていた。

先生からの連絡が始まった。

「知らないと思うが、明日はテストだ。五教科な。中学生内容だから安心しろ。」

……。ああーそうですか。

「…………（だったら）」

前の奴は冷や汗をかいてる。

「統也……。頼みがあ「いやだ。」…………」

自己紹介を邪魔したおかえしだ。

「……鬼。」

消えてしまいそうな声で凌はつぶやいてくる。

しかたがない。人生とは無情なのだよ。

「連絡は以上解散！」

先生が言つと同時に凌が飛びついてくるいきおいで

「お願いします。勉強を教えてください。」

「いやだ。無能な生徒を持つ気はない。」

「じゃあ、橘さん。」

「じゃあ」とかむかつくわ。」

「……」

うあ、泣きそうになってる……

「いいよ！どうせ統也はまた一位だろうし！いいよ！もう、いいよ！

帰って勉強してやる。」

つと言って教室を飛び出していった。

「俺らも帰るか。」

「そうね、帰りましょ。」

冬華と下校できた。なんか役得だな。

この後、凌が押し掛けてきて、勉強を教えてくれっと言ってきたのはいうなでもないだろう。つま、俺は機嫌が良かったから教えてやった。

第十話：「じゃあ」とかむかつくわ。」（後書き）

意見、感想、評価、誤字脱字報告お願いします。

第十一話：「実際化け物を見ているのよ。」（前書き）

十話の方に伏線はりわすれたので直しました。

みなくても支障はありませんが違和感を感じる可能性があるので、
気になる方は見直してください。誠に申し訳ございません。

では、どうぞ

第十一話：「実際化け物を見ているのよ。」

今日は少し早く学校に来ることにした。そう言っても昨日よりは遅いけどな。

教室に入ると先客が数名おり、その中に見知った顔もあった。

「よっ、冬華。勉強か？」

「そうよ。他に何に見える。」

「何やってんだ？」

冬華のやってるノートを見た。

「……？」

グラフが書いてあった。うん、グラフだ。だけど x ・ y ・ z のグラフだった。

「それって、三次元のグラフだよな？」

「そうだけど。」

「お前の行ってた中学は授業が進んでいたのか？」

「ん？ああ、これは私の能力に空間の計算が必要だからやってるの。」

「へえー、後そこの計算間違ってるぞ。」

「あつ。ほんとね……って。え？」

「どうした、直さないのか？」

それとも計算を一からやり直すのか？いや、なんで間違ってる分かって

る感じだからそれはないか。

「直すけど、どうして間違ってるのが分かったの？」

「その計算が分かるからにだけど。」

「なんでわかるの？」

「なんでわかるかって言われても、公式を知ってるからとしか言えない。」

「もしかして御堂君が行ってた中学はものすごく授業が進んでいたとか？」

「いや、そんなことはない。それに仮にそうだとしても、いかにせん進み

過ぎだろ。」

そんな中学あったらヤバイだろ。

「……どうやって覚えたの？」

「…自学習だけ。」

「……………」

「どうした？お前は誰から習ったのか？」

「…違うけど。私の場合は能力に必要なだからやったのであってあなたの

場合は必要ないじゃない？」

「いや、使うぞ。枝が飛んできて、それを消す時とか。」

「…それだけ？」

「それだけ。」

「……じゃあ、なんでそんなのを覚えようとしたの？」

「暇だったから。」

「（化け物？）」

「その化け物を見るような目はやめてくれ。」

なんか視線に色々込められてるし。

「実際化け物を見てるのよ。」

「どこにいるんだ？」

「自覚ないならいいわ。」

もしかして俺のことか？ありえんな。あんなものは覚えようと思えばいつでもできるからな。

「そんなことよりあれはなに？」

「ん？」

ドアの方を指さしながら言ったのでそっちを見ると……

歩く屍がいた。

歩く屍：別名・早川 凌

第十一話：「実際化け物を見ているのよ。」（後書き）

意見、感想、評価、誤字脱字報告をくれると作者は喜びます。

第十二話：「あれ？昨日嫌がってなかった？」（前書き）

テスト前も変わらず投稿していたら点数がひどいことに……
でも後悔はありません！そしてこれからも応援よろしくお願いします。

第十二話：「あれ？昨日嫌がってなかった？」

歩く屍が近づいてきた。

「くんな。屍。」

「…さすがに酷いと思うわ。」

「どっちが？」

「両方よ。」

即答かよ。どちらかという冬華さんのひどいですよ。

「……おい。統也……昨日はありがとう。俺は……もう……だめだ。」

「ああ、そうだろうな。見るからに。」

「…なんか見るに堪えないわ。」

「絶対にお前の方がひどいからな。少しは遠慮してやれ。」

「あら？あなたからそんな言葉が出るってことは何か裏があるのね？」

「当然だ。」

なにを当たり前のこと言ってるんだ。このお嬢さんは。

「……どっちもひでえことには変わりねえよ。つで、なにが御所望だ？」

「いつものでいい。」

「……麻薬取引？」

「……」

「なによその目は。」

「バカか？」

「何でもいいから元気をくれ。」

「……せめて言う言葉の意味は合わせましょうよ……」

歩く屍と話を合わせるなんて無理だろ。

「つで、なんで麻薬の取引みたいなことしたの？」

「ああ、それは統也が昨日勉強を手伝ってくれたからだ。」

「あれ？昨日嫌がってなかった？」

「……機嫌が良くなったんだ。」

「なんでまた？」

「それは昨日「言ったら三枚に下ろす。」………すいません。」

絶対に知られるわけにはいかん。

「そこまで隠すとなるとかなりのことね。つま、楽しみはとつとくわ。」

ねっ、御堂君？」

「………」

黙るしかない。

「あの…「黙れ。」…すいません。」

こいつを黙らせればバレることもない。

「ふふふ。」

こっちはやっと仕返しができたみたいな顔をしてるし。

「もうお前らテスト勉強でもしてろ。」

「あなたは必要ないのね？」

「ああ、大学レベルならまだしも、中学だろ？必要ない。」

「うらやましい………」

人間だれでもやればできる。」

「やってもできねえよ。」

「化け物が普通の人間を語ってはいけないわ。」

色が戻ってきた凌となんか上機嫌の冬華による読心攻撃。

もう勘弁してくれ。

「……読心術は翼術師全員が使えるのか？」

「聞いたことないわ（けど）」

「だよな……」

だんだん気づいてきた。

俺は規格外なのか？

なんかショックだ。こんなに普通を望んでるのに。

「テスト前の悪あがきはやめて、私の話を聞け！」

今聞いた先生の言葉は天使の言葉より慈悲がこもっていた。

つと、解釈できるほどショックだった。

第十二話：「あれ？昨日嫌がってなかった？」（後書き）

数学の点数が半分に……

第十三話：「じゃあ、私もお世話になるわ。」（前書き）

テスト週間に入るので更新が遅くなるかもしれないのでご了承ください。

本当にすいません。

第十三話：「じゃあ、私もお世話になるわ。」

「じゃあ、テストを始めろ！一教科30分で5教科だ。休憩はなしでぶつつ続け

だ。大丈夫だ、一応30分で終われるように作った。つま、終われるのは天才だ

けだな。…せいぜいがんばれよ、私のかわいい生徒たち。」

「くそ！」

「問題多っ！」

「無理だろー！！！」

教室のそこらじゅうから落胆の声が聞こえる。

こんなにかわいそうな生徒たちを

「うるさい！テストしっかりやれ！！！」

一蹴する教師織田 長巳その人である。

「うち、仕方ない。おまけで今から三十分にしてやる。」

「……………（あんま変わんない）……………」

ああ、生徒たちの心の声が聞こえる。

「さっさと始める！」

その声を聞いたとたん生徒たちは机に向かった。

ああ、これはたしかに普通の人じゃ無理だな。

なかなかの感じの問題がわんさかあるし、かんばれ。

凌、お前ならやれる！（笑）

っじゃ、俺もテストをやるか……

「俺はもう燃えつきた……」

「私も手をぬくつもりだったけどぬけなかった。」

「普通にやった。」

「お前が普通にやれるテストだと……」

「化け物の普通はどのくらいなの？」

「統也の普通は英検準1級ぐらい。」

「リアルね。」

こいつらなにげにひつれいだな。

「つで、凌はちゃんとできたのか？」

「半分ぐらいだな。」

「あれを半分って…なかなかできはいいと思うぞ。」

「そう言ってもらえると白黒になったかがあるな。」

「ああ、また白黒になってるしな」

「どついう構造なの？」

「マジで白黒になってんのか！……じゃあ、ゲーセン行こつぜ！」

「「どこが」じゃあ」なんだ（なの）？」

「俺の色を取り戻しに行くあたり。」

「ああ、わかった。仕方ねえ付き合ってやる。」

「あら、あっさりしてるのね。」

「こいつと行くと得するしな。」

「じゃあ、私もお世話になるわ。」

おお、ラッキー。普通にテスト受けたから神様からののご褒美だな。

第十三話：「じゃあ、私もお世話になるわ。」（後書き）

数学の点数を戻すために頑張ります！

第十四話：「役立たず？」（前書き）

凌が暴走 W W W

第十四話：「役立たず？」

所変わって午前中の早くにゲーセンに来ている。

先生の無理やりな時間配分のおかげで（せいで）早く学校が終わったわけだが…この時間にゲーセンにいるような奴らまともな奴に見える
ない

な。今も外見そんなような奴に絶賛睨まれ中である。

「……」

「……♪♪」

片方は私に近づかないでオーラをガラの悪い連中にふりまき、

もう片方はそんなお構いなしに楽しそうにUFOキャッチャーの景
品を

眺めてどれを狙うか決めている。

「…よし。これにするか。」

「おい、にいちゃん達。」

おいおい話かけてきやがった。

「あん？」

「……」

「はあ。」

上から凌、冬華、俺の順である。

ちなみに機嫌はうえから

最悪

悪い

呆れ

である。

「ここは俺達の縄張りなんだよ。普通の時間は仕方ないにしてもこんな時間

に来るってことは覚悟できてんのか？」

「「「……」「」」

前時代すぎるぞ。不良ってこんなもんなのか？知らんけど。

「覚悟ができてるとっていいのか？今なら金を置いてきや許してやるぜ。」

「「「「「へへへへへ……」「」」」」

なんか後ろに五人くらいついてきたし。

「でも、ねえちゃんとは別だぜ。俺たちと来てもらう。」

「それ賛成えー！」

「そりゃいい。」

「なかなか美人だし。」

なんか勝手にいいだしてるし、

そして……

「……………」

普段怒らない明るい奴がマジギレしてる。

「……………ちよつとここだと都合が悪いからここ出たところの路地裏に行くか。」

「話が分かるねえ」

つとということで路地裏に来て、

「てめえら！ふざけてんじゃねえぞ！！」

そう言つて凌が早々に一人を殴り飛ばした。

「おいおい？やる気か？」

不良も臨界体制に入るが……

「がはっ」

「ぐぼらっ」

一対五で負けていた。

凌にはかなわないと思ったのか標的を変えてきたが…

バサッ

冬華が翼を展開して、

「いてっ。」

「なんだ壁があるぞ？」

「こいつ翼術師か！」

俺たち二人の方にはこれない。

そして凌も、

バサッ

翼を展開して三次元の戦いをしている。

能力はオフにしているらしい。

「ねえ、御堂君。」

「なんだ？」

バキッ

ゴキッ

「あなたって…」

ドゴッ

ドサッ

「役立たず？」

「……ごもつともです。」

「よし。終わった。」

俺の心は倒れてる不良並みに傷ついた。

第十四話：「役立たず？」（後書き）

意見、感想、評価、誤字脱字報告お願いします。

第十五話：「じゃっ、終わったことだし戻りま……？」（前書き）

すみません。テスト期間なので更新が遅れます。

冬華のセリフをタイトルにしているんですが、今回は二回しかしゃべらないので少しおかしなタイトルです。

第十五話：「じゃっ、終わったことだし戻りま……?」

不良が地面にへバリつくように倒れているところを見ると凌は手加減をあまり

していなかったらしい。

「ああ、やっと終わった。」

「……やっと言う長さか?」

「ああ、一人に対して20秒も使っちゃったからな。」

不良に使う20秒は持ち合わせていないらしい。

「じゃっ、終わったことだし戻りま『ドガッ』……?」

「なんか聞こえなかったか?」

「はははは、統也なにをいつているんだ? なにも『バキッ』……」

明らかに凌が不機嫌になっていき。そして、

「ああん!」

逆に不良になっていて、

「まだいたのか! 雑魚は私の前から失せな!」

「ッつ！」

なんか女性から攻撃を受けた。

それも翼を展開してもよけるのが精いっぱいの一撃を。

「……………」

「…………私の初撃をよけるなんて…おもしろくなりそうだ。」

聞いたことあるような、ないような声が聞こえて

「この情熱を受け取りな！」

「っち！」

小さな火球が飛んできた。それが俺たちの方に飛んできたので冬華が防い

で、凌が飛翔する。なんか、火球といい、声といい、路地裏独特の暗さ

で顔がみえないとしても一人しか心当たりがない……。

「せいっ！」

「へえ、回避の後の攻撃が様になっているねえ、ますます楽しくな
って

きた！」

二人は気づいていないのか？もしかして気づいているのは俺だけなのか？

そう思い、冬華を見ると。

「……………」

能力を発動させながらかたく目を閉じていた。

これは絶対に気づいているな。

「っは！」

「せいっ！」

まだ攻防が続いている。もういつまで続くかわからんな。

「……………統也。逃げるぞ。」

「っ！急にどうした？」

「あちらさん、かなり手加減して楽しんでやがる…。そして、それももう少しで終わる。だから逃げるぞ。」

「……………」

こいつまだ相手のこと気づいてない……………」

もう末期だろ。

俺は仕方なく鈍い友人のために『あちらさん』に問う。

「……先生。悪ふだけは止めましょう。」

つと。

第十五話：「じゃっ、終わったことだし戻りま……？」（後書き）

テストって嫌ですね……

第16話：「……馬鹿バツカとはよく言ったものね。」（前書き）

すみません。テスト勉強らしきものしていておくれました。

第16話：「……馬鹿バツカとはよく言ったものね。」

「ははははは！統也。なに言っただ？教師が生徒に攻撃してくるわけ

ないじゃん！」

「私としては教師を殴ってこようとして、さらには殴ってくる生徒はい

ないと信じたかったがね。」

「……」

「……」

一人の沈黙は驚きを意味して、

二人の沈黙は「今更なに言っただ？」という呆れを意味していた。

「…先生？」

「なんだ？」

「今日もお綺麗ですね。」

「『も』が昨日会ったばかりの人にという言葉考えてから言え。」

「……」

初っ端でくじけた……なんかかわいそうに見えてくらから不思議だ。

「……それを不思議だっと思ってる時点であなたの人格が分かるわ。」

「……読心術と心を^{えく}決めるような言葉は一緒に使っていけないって
いう法律を作ろう。うん、それがいい。」

こんな普通を演じていたのになんでこんなに否定させるのだろうか？

「それが普通じゃないからよ。」

「……」

もう、諦めよう。

そう思って凌の方に意識をむけると、

「……お酒の好みはなんですか？」

「ほお。未成年がお酒の情報を得てなにに使うか気になるな。」

「……天気がいいですね。」

「それはもう3度目だ。それにここからは空がみえにくいと何度
言ったらわかるんだ？」

まだ頑張っていた。

もう賞賛を与えてもいい気がする。

「……雨が降りそうですね。」

「」「」

もうダメだ！

「凌。もう……。終わりだ。諦めろ。」

「統也……。俺は……。」

これでこいつは救われる。

「俺は……。俺は……。俺は！」

「諦めない！！」

「っ！？」

なにを言っただこいつ！

「統也……。諦めたら……。終わりなんだぜ？」

「……凌……お前……。」

「だから、俺は先生を言いくるめる。」

「ああ、行つて来い。」

「逝つてくる。」

少し『行つてくる。』の発音が違ったのはきつと感情の高ぶりからだろう。

そして、凌は強敵せんせいに向き直る。

「……またせたな。」

「っふ、そうでもないさ。さあ、はじめよつじゃないか。」

「……馬鹿バツカとはよく言ったものね。」

今ここに新たな戦いが！

第16話：「……馬鹿バツカとはよく言ったものね。」（後書き）

ちょっとやってしまった感があります。

第十七話：「……お騒がせしました。」（前書き）

テストがまだ続いてます…
もう作者のHPはぜろよ！
わたし

第十七話：「……お騒がせしました。」

「さあ、私に挑み倒し（いいくるめ）てみよ。」

「……先生。確か俺に火球をうちましたよね？」

「ん？そうだが。」

「それってまずくないですか？」

「愛の鞭だからまずくない。」

「……」

「……」

「「……ゴクリ」

無言の空間に俺と冬華の唾を飲み込む音だけが響く。

そして…

「……万策尽きた。」

「「「……」」」

こいつは馬鹿なのか？

っていうか、あれは策なのか？それすら曖昧だ。

ツカツカ

凌の前まで行く。

「ん？どうした？」

ガシッ

頭をつかみ、俺も先生の方を向き、

「……おさがせしました。」

頭を下げさせた。

「っちょ！謝る必要はない?!」

っと言って頭を上げた凌は

ゴチン

「~~~~~ッ!」

なにかぶつかった。まあ、犯人はわかってるがな。

犯人の方を向くと

「……私じゃないわ／＼／」

翼を展開したまま、顔赤くしてそっぽを向いた。

犯人は橘 冬華さんでしたっつと。

「なんだ？！天井でも降ってきたのか？いや、外だから天井じゃないか。」

「……痛くないか？」

「心配してくれるのか？」

「いや、俺がやったことだから。」

冬華の能力を隠すためにここは騙させてもらっつ。

「ほお」

先生は状況が読めたらしい。まあ、黙っててくれることを祈ろっつ。

「お前かぁ！どこでやった！人間にこんなに硬い部分があるのか？さあ、

答えろ！」

「……そんなこと言わせんな／＼／」

「本当にどこでやったんだぁ~~~~~！！！！」

まあ、これで話を反らせることできた。

「つま、兎に角戻ろっつ。」

「待て！まだどこでやったか聞いてない！」

「そうだ！！橘さんならしってますよね？」

「……お騒がせしました。」

「無視かあ~~~~~！！」

「ほら、戻るぞ。」

「いや、人間にあんなに硬い部分がどこにあるのかわかるまで動かん！」

「さっさと戻れ！！」

凌は先生の蹴りをくらった。

凌に大ダメージ。

凌は戦意を喪失した。

「……まことに申し訳ございませんでした。」

こうして強敵との戦いは終わった。

そして、ゲーセンに再度入る。

第十七話：「……お騒がせしました。」（後書き）

まあ、今回も中間くらい順位になると思うので大丈夫だと思いますが
万が一赤点があった場合更新が一カ月くらいできません。

第十八話：「…………モフモフなんてしないわよ。」（前書き）

テストがやっと終わりました。これで更新スピードが戻ります。

そして、少し書き方を変えました。

第十八話：「……モフモフなんてしないわよ。」

「じゃあー！！取ったどお！！」

ゲーセンに再度来たら凌のテンションは戻った（むしろ上がったか？）。

そんな凌は某一万である期間だけ生活する番組でタコをとった時のセリフを
言っていたりする。

ちなみにUFOキャッチャーで白クマのぬいぐるみをとっていた。

「……」

冬華は凌の以外な特技に驚いている。

まあ、100%の確率でUFOキャッチャーを成功させる奴なんてなかなかいないからな。

昔そんな凌の姿を見ていて

『まるでロックオンしてるみたいだな。』

つと言ったら、

『成層圏外までいけねえよ！』

って言われた。いまだに何のことなのかわからない。

こうしてるうちに凌はまたぬいぐるみ（黒くま）をとっている。

今日、このゲーセンは歴史に残る赤字記録をまた更新するだろう。

このゲーセンは凌の行動範囲にあるばかりにこんな状態に……

店員は凌の顔を覚えているのか引きつった笑みを浮かべているだけだった。

まあ、憐れみを込めて合掌はしてやろう。南無三。

つあ、店員が苦笑いを返してきたぞ。営業スマイルも忘れるほどシヨッキ

ングなんだろうなあ、あれは。

「……なに店員を拝んでんの？」

「いや、拝んでない。憐れみ込めて合掌してる。」

「憐れみを含んでいるなら止めろっと思うでしょうね。」

「……あれを止められると思うか？」

そう言っ凌の方を指さす。

「楽しいよな！！なあ！アレ○ヤ！」

「「……」」

黙って冬華も店員へ合掌した。

「あれを止める勇氣はないわ。」

「ああ、俺もない。」

あれを止めれる奴がいるんなら見てみたい。

「いつもああなるの？」

「いつもはあそこまでひどくない。あつて『ロックオン・ストロ
ス。乱れ

撃つぜ！』ぐらいだな！」

「……それも十分ひどいと思うけど。」

「でもあれよりマシだろ。」

「そうね。」

「全てお見通しなのだよ！ハハハハハハハ！」

「お前らなにがほしい？」

「「おかえり」「」

「……なんでおかえりなんだ？」

知らなくていいよ、傷ついただけだから。

「まあいいや。っで、どれがいい？」

そう言って見せてくるのは

くま（赤）、くま（青）、くま（水色）、くま（ピンク）、くま（黄色）、

くま（黄緑）、くま（白）、くま（灰色）、くま（黒）。

「「なんでくまばっかなんだ（なの）？」」

「たくさんあつてくまったから！なんちって。」

「じゃあ、黒で。」

「私は白がいいわ。」

「スルーかよ！まあいいや。ほい、ほい。」

俺と冬華はそれぞれくまを買った。

冬華はくまをポンポンして遊んでる。

「「……」」

俺と凌は期待のまなざしで冬華をみた。

「……モフモフなんてしないわよ。」

「「っち!」「」

最後は悔しさが残る一日だった。

第十八話：「…………モフモフなんてしないわよ。」（後書き）

00 ネタとギアスネタ分かっていただけたらうれしいです。

第十九話：「……少なくとも普通の人間にはしよつとしてないでしょうね。」（前

なんか少し短くなってしまいました。

第十九話：「…少なくとも普通の人間にはしようとしてないでしょうね。」

今日から普通の授業が始まったのだが…

「こんな問題で躓く奴なんていないよな？よし、進むぞ！」

進むスピードがいよーに早い。これに合わせられる奴はきっとないだろう。

実際、凌は嫌な汗をかきながらノートをとっている。

教え方がうまいのにやたらスピードが早いから最終的についていけなくなる。

だが、ついていけた奴らは確実に力をつける。実力主義の典型だ。

そう、まるで織田 信長のような。

それが織田 長巳先生の授業への評価だった。

「ああー。やっと昼休みだ。たっく、あの人は俺達を変革者にする気か？」

「…少なくとも普通の人間にはしようとしてないでしょうね。」

「……飯食いたい。」

「「あんだ（あなた）はずっと寝てただろ（でしょ）！」」

「寝疲れ。」

「……寝ていてよくあんな問題に答えられるわね。」

「寝てたら答えられねえよ。単に起きた瞬間考えたただけだ。」

そんなのいつものことだ。

「チートだな。」

「はあ、そんなこと言っていると弁当わたさんぞ。」

「つえ！すいません！ください！」

「……なんで早川くんの分まで作ってるの？」

なんか蔑むような目で見てくるぞ。たぶん、勘違いしてるな。

「昨日のぬいぐるみのお礼だよ。」

「統也の料理は普通にうまいからな。」

「ん？御党君つてもしかして料理までできるの？」

「一人暮らし3年間やってりゃだれでも身に着く。」

「……神は二物を与えず。っというのは嘘ね。」

「お前も人のこと言えんのか？」

「どうして？」

「容姿、成績、スタイル、そして弁当から察するに料理もできる。こんな

に持ってたらさぞ同性から羨まれたらうな。」

「そう？自分の評価なんて気にすることなんてあんまりなかったから分から

ないわ。それに同性、異性にかかわらず私を見る目は一緒だったわ。」

「……弁当食おう。」

なんか触れちゃいけない部分にふれた気がする。

それから楽しい――（？）昼食をした。

「解散。」

先生に似合いすぎる帰りのあいさつで今日を締めくくった。

こんなにも平和なのに最近思う。

こんな日常はあまり長く続かない。

そんな気がしてなかった。

??? SIDE

「……坊ちゃん。」

第十九話：「…少なくとも普通の人間にはしようとしてないでしょうね。」（後

評価、感想等待着てます。

第二十話：「……抵抗すると言ったら？」（前書き）

すみません、遅れました。

第二十話：「……抵抗すると言ったら？」

入学してから一週間がたった。なにかと密度が高い日々だったな。

凌が不良にからまれたり、ゴロツキにからまれたり、警察に指名手配犯と

間違えられたりとそんなことばかりあったな。

こんな日常がキョウも終わろうとしていた。

冬香SIDE

今日はそろそろ散りはじめてきた桜を見に来た。

「そろそろこの桜も見納めね……」

そう思うと少しさびしかった。

この桜は出会いの桜だから。

私を変えるきっかけとなった桜だから。

「それだけじゃないわね……」

この桜にはなにか惹かれる。きっとそういう桜なんだろう。

「……」

「……あなたが橘 冬華か？」

「！？」

なに！？気配もなかったわよ！

黒服の男が3人立っていた。そのうちの一人が話しかけてくる。

「大丈夫だ。おとなしくしてくれればいい。」

「……抵抗すると言ったら？」

「……こうする。」

パンツ

「ッ！？」

なにこいつ！銃で撃ってきたわよ！こっちの防御障壁が間にあわなかった

らどうなっていたの？いちおうゴム弾ぽいけど危ないことに変わらない。

しかも御丁寧に改造してあるのか音がほとんど出てない。

「……ほお、そういう能力かぁ、なら！」

ッダ

パンッ

一人が接近してきて、もう一人が援護射撃、最後の一人が周りの警戒。

「つく！」

正直私の能力は接近に弱い。だから、翼である程度距離をとって防御するしかない。

「ハッ！」

でも相手は明らかにプロだ。そんなは関係なしに間合いを詰めてきた。

完全に蹴りが入ったと思った時、

「ぐあああああ！！！」

警戒していた一人だろうか？急に叫び声をあげた。

そのおかげ私に入ろうとしていた蹴りは止まっていた。

「どうした！？」

「蒼が！」

「蒼がどうした？」

「貴様らあああああああ！！」

その叫びは私を変えた人のものだった。

第二十一話：今回は出番ないわ！（前書き）

国語の課題がやったらたまっていまして遅れました。

赤点ぎり避けました！現代文のない国語なんて嫌だ！

第二十一話：今回は出番ないわ！

俺はいつもの日常を過ごしながらなにか違和感を感じていた。

なにかいつも感じてるものが急にとれたのようなそんな感じだ。

こう思いつつもなににもできないはなにか釈然としない。

そう思いつつ校内をぶらつく。

桜の木があるあたりに差し掛かった。その時、

パンッ

「!？」

銃声が聞こえた。しかも聞いたことあるものだ。

そう。SP等が使う鎮静用特殊ゴム銃だ。

「っち！まさかあいつ等！」

俺はあたりを気にせず翼を展開し、銃声の聞こえた方に飛んだ。

そこで……

ゴム弾を防いでる冬華の姿が目に入った。

「……」

俺は察した。

こいつ等は……

壊してもいいと。

まず後ろにいる奴一（こっちから見ると一番近い）の肩に細くビー
ム状の

光弾一（光線？）を放つ。

放ったものは的確に肩を撃ちぬき、肩に直径1？ほどの風穴を作
った。

「ぐあああああ！」

黒服の男は叫び声をあげてなにか騒いでいた。俺にはそんなことは
どうでも

いいことだった。

俺には……

冬華を蹴ろうとしていた奴がいた方が重要だった。

「貴様らあああああああ！！！」

俺は怒りの声をあげた。

そして援護をしていた奴らしきに標的を変える。

パンツ

パンツ

さすがというべきか、臨機応変に対応してきた。

だが……

俺に関係ない。

シュウ

シュウ

俺は即座に光弾を二発放ち、ゴム弾を消した。

そして翼に力を込めて急接近して、こめかみに蹴りを一発。

ガンッ

「グッ！」

黒服はまだ倒れない。無論、俺もこれで訓練された奴を倒せるとは思っていない。

さらにがら空きになった両太ももに1?ぐらい風穴をあける。

「ぐはっ!?!」

バタッ

黒服はあまりの痛みに気絶したらしい。

「……」

「……」

最後の黒服と無言で対峙した。

桜の木がざわめく音だけが流れる。

そんな中、先に沈黙を破ったのは黒服だった。

「……お久しぶりです、坊ちゃん。いや、もう坊ちゃんっという歳ではありま

せんね。では、あらためて。……お久しぶりです、統也様。」

「……佐藤。お前も部下を持つようになったんだな。」

第二十一話：今回は出番ないわ！（後書き）

タイトルがおかしくてすいません。

第二十二話：「っえ？怒ってるの？」（前書き）

短くてすみません

第二十二話：「っえ？怒ってるの？」

「……はい。私もここまで成長しました。それより統也様に覚えていただきたい
ていたことが驚きです。」

「……使用人の顔と名前ぐらい全員覚えている。見くびるな。」

「……五年間の間会っていないというのに覚えているのは統也様と
旦那様
ぐらいのものです。」

「そうだ。あの野郎は死んだか？」

「……御自分のお父上をあの野郎呼ばわりするなんて相変わらずで
すね。」

それに死んだらニュースになってますよ……」

「そりゃそうだな。」

「……あ、あの？」

今までずっと黙っていた冬華が口を開いた。

「どうした？」

「どうかしましたか？」

「……二人はお知り合いですよね？どんな関係ですか？」

「私は元御堂家の使用人です。」

「……？」

「安心しろ。明日説明してやる。」

「……わかったわ。」

冬華は納得がいかない表情だが了承してくれた。

「それと佐藤さんでしたっけ？なんで私を襲ったんですか？」

「……」

「……」

俺と佐藤は黙ってしまう。

しかし、二人の沈黙にはそれぞれの意味があった。

俺は怒りを隠すため。

佐藤は表情から察するに申し訳なさのあまりだろう。

「……理由は言えません。統也様がお怒りなりのもわかります。」

「っえ？怒ってるの？」

「ええ、私と対峙してる時から一歩でも動けば殺そうとしようと」

するほどです。話してる時は必死に感情を殺しておりました。」

「そうなの？」

「……ああ。」

もう隠す必要はないな。

ツゾ

「「！？」」

あたりの空気が重くなった。

いや、重くした。

「……なぜ冬華を襲った？」

「そ、それは……」

「答えろ！！」

「！？」

「……」

冬華は表情を固まらせ、佐藤はさらに黙ってしまふ。

「「「……」」」

何分沈黙が続いたのだろうか？いや、まだ少ししかたっていないはずだ。

それが長く感じるのだから空気が重く時間がココだけ止まったように感じるのだろう。

だが、佐藤は口を開いて、

「……旦那様と統也様と同じくらい大事なものを天秤にかけています。それだけしか言えません。」

そう言った。

第二十三話：「そうなの……」（前書き）

更新遅いです！さらにド短いです！すいません！の三拍子がそろって
います。

第二十三話：「そうなの……」

「…そうか。じゃあ、明日親父の所に行くから伝えてくれ。」

少し諦め気味で言つて、殺気をしまう。

「っ！？本当ですか！？3年ぶりですよ！」

なんか驚かれた……。つま、それぐらいの勢いで出てきたからな。

「……すいません、統也様。私はいまは別の部署のため旦那様に連絡はできません。」

うわぁ……、面倒だな。

「わかった。自分で連絡する。それと、そこに転がっている奴はそつちでなんとかしてくれ。」

「了解しました。」

佐藤はまだ意識のある方によつていった。

「歩けるか？」

「すいません、肩を貸してください。一人では少し……」

「わかった。少し待っている。」

そう言つて佐藤は意識のない奴を肩に担いできてから意識のある奴の所
に戻つていった。

「ほら、行くぞ。」

「はい。」

そして佐藤は翼を展開して去つて行つた。

「……あの人、翼術師だったの？」

冬華は久しぶりに口を開いた。

「ああ。戦闘には使えないけどな。」

「そうなの……」

「……」

「……」

どこか気まずい空気が流れるが、そんなこと気にせずケータイを手に
取り電話をかける。

そうすると3コール以内（正確には2コール）にでてきた。

『はい。こちら御堂邸です。』

「コードE-57だ。さつさとつないでくれ。」

『っ！？わかりました。少々お待ちください。』

一瞬取り乱したがすぐに平常心を取り戻すあたりちゃんと言導が行き届いていた。

そんなことを思っている内に電話の相手が変わった。

『私だ。』

「明日そちらに行く。時間は10時くらいだ、時間を作っておいてくれ。」

「……じゃあな、親父。」

『っ！？統也か！』

電話越しに驚愕の声が聞こえたがそんなことは無視して電話をきいて、

電源も落とした。

第二十四話：「これじゃあ言葉のドッジボールね……」（前書き）

すみません。遊戯王にはまって更新遅れました。

第二十四話：「これじゃあ言葉のドッチボールね……」

「じゃあ、明日の九時に駅前に来てくれ。」

「説明なし!？」

なんか騒ぎ出したぞ……

なぜだ……？

「あなた今『なんでこいつ騒ぎ出してんの?』とか思ってるでしょ? そうでしょ!

つというかそうよ! 私としてはなんでそんなことをほざけるのかしたいわね! 本当

にあなたって人間? あんなでたらめな才能に能力がある時点で『人外ね……』とは

思ったけどそういうことまで人と掛け離れてるの? 言ってる内に人間ってことが信

じられなくなってきた! もう一度聞くけどあなたって本当に人間? 霊長類ヒト科?

嘘ついてない? 正直に言った方がいいわよ!」

なんか人が変わった……

凌流に言うとかキャラ崩壊だったかな?

それよりも……

「人ってそんなに一息でしゃべれるだな……、初めて知った。」

「明らかに今の状況で指摘する所じゃない!!」

ドゴン

「ッガハ！」

今こいつ殴ってきたぞ！腹を！3メートルぐらい離れた所から！

しかも人がだしてはいけない音の威力のやつを。

もしかして……こいつ！？

「まさか流派東方不敗の伝承者か!？」

拳圧でここまでの威力が出せる流派なんて他に知らんぞ！

「なぜ00が分からなくてそっちが分かるの!!」

ドゴン

「っ!!」

また同じところを殴ってきやがった！

今のやつあたりだ!!絶対そうだ!!!

「だいたいこれは拳圧じゃなくて翼術よ!よ・う・じ・ゆ・っ!!」

「お前は防御障壁を飛ばせるのか?」

痛む腹を押さえながら問^きく。

「できないことはないけど時間がかかるわ。あれは拳の3メートル先に防御障壁を張ったの。座標ではなく、拳の3メートル先という条件で展開したから早いし、防御にはむいてないけどこういうのには使えるの。」

いらん応力だな。こういうことに使うなら。

「……っということで、明日学校サボって来いよ。」

「はあ……。もうなにを言っても無駄ね。これじゃあ言葉のドツチボールね……」

「うまいな。今の。」

「いちいち触れないで！失言だから！」

良いと思っただけだな……

「じゃあ、明日全部話してよね！じゃっ！」

冬華は逃げるように立ち去っていった。

「……どこに行くか言っていないけどいいのか？」

つま、いいか。

第二十五話：「……ああはないんじゃない？」（前書き）

ストーリーが進まなくてすみません。

第二十五話：「……ああはないんじゃない？」

時は進んで今俺は駅前にいる。

織田先生には今日学校を休むことと理由を伝えてある。

先生からは「面倒な問題はおこすな。しかし、起こすならとびつき
り大きくて面白
いものにしろ！」と言われているが基本的に面倒なことになりそ
うなので先生が
望んでいるようなことはおきないだろう。

そんなこんなで現在時刻AM9:50。

そろそろ来るところだろうと思っていると待ち人はきた。

その待ち人こと橘 冬華は白いワンピースの上にカーディガンを羽
織って登場した。

……昨日の暴力をふるった人と同じ人とは何回目をこすってもみえ
ないな。

むしろ病弱に見えるぐらいだ。

そのぐらい可憐だった。

「……待った？」

「……ああ。」

あれ？『ああ』じゃだめじゃね？

「……………」

「……………」

沈黙がきつい…

「……………ああはないんじゃない？」

「おっしゃる通りです。」

反論の余地がないな…

「もとから期待はしてないけど……………。まあ、いいわ。っで、どこに行くの？」

「それは言いにな…。着いてからじゃないとわからん。切符は俺が買って
くるから問題ない。」

「いいかげんどこに行くか教えてくれない？」

「……………実家。」

「実家？」

「実家。」

「……本当？」

「本当。」

「……帰っていい？」

「だめだ。」

無駄ないいあいだな…

「わかったわ。行けばいいんですよ。」

「そうだ。」

「…はあ。」

「それと…」

「なに？」

「似合ってるぞ。その服。」

「……え！？」

「じゃあ、切符買ってくる。」

「え、ええ。わ、わかったわ。」

なんで赤くなってるんだ？

女性の私服を褒めるのは当たり前だろうに？

そんなことを思いながら切符を買いに行くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0277u/>

その翼に願いを込めて...

2011年10月9日06時43分発行